

第二回東大本番レベル模試 所感

■英語 文責：高澤

《総評》標準

全体通して標準的（簡単というわけではなく、適切な難易度の良問という意）な問題が目立った。英語が得意な受験生は高得点を狙えたはず。英語においては特に「時間」が重要になってくる。今回も時間が足りなかった受験生も多かっただろう。「解く順番などを工夫して得点を最大化する」という短期的な視点と、「根本的な英語の処理速度を上げる」という長期的な視点の両方からアプローチが望まれる。焦らず英語と向き合って欲しい。

《1A》やや易

要約問題である。単語・文法・内容いずれも平易だったので高得点を取った受験生が多かったのではないかと。ただ、字数が100～120字と比較的多いため、解答に含めるべき範囲を多少広げる必要がある。そのため第三段落からは紅茶が感染症の蔓延を防いだことだけでなく(タイムリーですね)そのような効用を持つ理由や、労働力の安定的な供給を可能にしたという結果まで踏み込んで書くことが求められた。

《1B》標準

シラミの話からいきなり人類の進化まで話が発展し、数万年単位で時間が動いていくため、限られた時間で全体を把握するのが難しかったかもしれないが、使われている単語自体はそこまで難しくないので、落ち着いて読解できたかどうか。特に(イ)の時系列を考えて年数を答える問題はきちんと整理し、何を問われているのか理解できないと正解に至らない問題だった。(ア)については個人的に(3)と(5)が当てはめにくいと感じた。

《2A》やや易

自由英作の問題である。「好き／低収入」「好きではない／高収入」という二択が提示されていた。身近なテーマだったので書き易かったのではないかと。素直に冒頭で自らの立場を明示し二文目以降でその理由づけを行っていき。意味や綴りが曖昧な単語や成句の使用は避け、つまらないミスによる失点はゼロに押さえてほしい。また、解答の最後で「だから私は〇〇だと思う」とように冒頭の文章をほとんど繰り返す受験生も見られるが、内容に乏しいと判断される可能性が高いので避けるべきである。適切な言い換えや理由づけのまとめで締めくくることが好ましい。

《2B》標準

和文英訳問題である。英訳問題で大切なことはまず幹となる文構成を把握すること。細かいニュアンスや逐語訳に初めから拘ってはいままとまりのない分りにくい文章になってしまう。点の多寡に関わらずしっかりと解答解説を読んで解答に至るまでのプロセスを確認してほしい。今回の問題では「ちょうど」や「似ている」あるいは「振り返りながら」などをどう訳すか迷った受験生もいたのではないかと。意味を捉えた言い換えは全く問題ないので自分の分かる表現に押し込もう。

《3》

(A) 標準 (B) 標準 (C) やや難

東大のリスニングにおいて、放送された英語を全て理解するのは非常に困難であるしそもそも全て理解する必要はない。問題となっている箇所を聞き逃さないように注意深く聴くことが大切である。そのためにはやはり前もって問題文を眺めておくことが望ましい。

《4A》標準

単語の並び替え問題である。正誤問題ではなかったことに胸を撫で下ろした受験生もいたかと思われる。正誤問題に比べて解き易いはずだが、4問目の“neither is there~”の倒置など油断できない問題もあった。文章の内容自体は身近なテーマで比較的楽に読めたのではないか。正解にたどり着くためにはある程度試行錯誤が求められるので、目安の時間を決めてそれ以上考えても分らなければ飛ばして次にいくというのも手だろう。正直、4Aについては3問出来れば御の字くらいに考えていい気はする。

《4B》標準

内容説明及び英文和訳の問題である。(ア)は“the person whose shoulder is wet”という表現が何を表しているのか分かれば正解に近づけたはず。解けなかった人は解答を見て「ああそうか」と納得できればよい。(イ)は後半の分詞構文の訳をしっかりと確認しておいてほしい。点を稼ぎたい問題である。(少し逸れますが“infant(幼児)”の代名詞に“it”が当てられているのは面白いですね。)(ウ)は前後の内容を踏まえて傍線部の「感情の方向をそらす」を説明する問題。満点とはいかなくとも部分点は欲しかったところ。

《5》やや易

今回は物語と言うよりは随筆的な文章が題材となった。ネイティブ特有の表現が問題になることもなく、高得点を狙えたのではないか。冒頭の(ア)には forever が入るが、これが分かれば筆者の叔母がどんな人生を送ったのか、文を読まずとも推測できる。(A)は“be up for”という表現を知らなくても直後の内容から「乗り気なのだろう」と推測できたかどうか。(B)は直後に答えがそのまま書いてあるので正解したかった。(C)は“the ones”が指しているモノ、並びに“which”が省略されていることが分かるかどうか。傍線部自体は短いが実力差が出る問題だったように思う。要復習である。(D)の各小問に難しい問いは見当たらない。強いて言うなら(36)の“Who left who?”が少し分かり辛かったか。大問5では多少の推測力が要される場合が多い。本番で高得点を取るために読解の経験をたくさん積んでおこう。

■理系数学 文責：松尾龍

総評：やや難

全体的に骨のある問題が多かったように思われる。記述量も多く、各大問完答するのが大変だったかもしれない。こういうセットの場合はテストへの取り組み方が重要になってくる。難しい問題に時間をかけすぎず、できる問題を正確に解き切り、合格するために確保したい点数を着実に得点できるようになってほしい。

第1問：標準

確率計算の問題。ぜひ得点しておきたい。(1)規則を正しく把握しよう(図や表にしてまとめておくのがオススメ)。nの範囲など、細かい議論にも気を配ろう。新しく数列を定めて漸化式的に解くこともできる。復習しておこう。(2) p_{n+1} と p_n の差を 0 と比較する典型問題である。

第2問：標準

約数に関する問題。(1)(2)(3)問題文の理解ができれば、ここまでは自然に解き進められるであろう。(3)では $r=2$ のときをしっかりと場合分けしよう。(4) $f(n)$ が奇数となるのは、n が(平方数)または $2 \times$ (平方数)であるときだということに気付くとスムーズに答えを求められることができる。

第3問：やや難

漸化式と極限についての問題。 b_n の一般項が求められるので、それを利用する。(1) 丁寧に説明して、確実に得点しよう。(2) a_n についての漸化式から求める値が予想できるので、やりやすかったのではないだろうか。(3) 複雑な計算を落ち着いて進めよう。 α 、 β のように文字を自分で置き、最後にその値を代入することで、途中計算が少し楽になる。最後の部分の記述を復習しておこう。

第4問：やや難

三角関数のグラフについての問題。グラフを用いた証明が望ましいが、その際に言葉を省略し過ぎないようにしよう。また、三角関数の公式や極限公式をこれを機に復習しておこう。(1) 正確に微分しよう。(2) $y=h(x)$ のグラフを用いて証明する。(3) ぜひ得点しておきたい。(4) まず、 $a \rightarrow +0$ のときに t がどう収束するのかを求めてから、本題に移ろう。極限公式を使うことを意識しながら計算を進めることがコツである。

第5問：やや難

領域、通過部分と積分計算の問題。見た目はシンプルだが意外と差が付く問題であるように思われる。(1)(2) 求める領域、通過範囲がどうなるか正しく把握し、抜かりなく説明することが要求された。(2)のような計算問題では値を正しく合わせるものがとても大切になってくる。一発で合わせるように集中して取り組むことはもちろん、見直しも一度は行おう。

第6問：やや難

複素数平面上の単位円と三角形に関する問題。複素数の扱いにいかにか習熟しているかが問われた。(1)(2) $|z|=1$ のとき、 $z\bar{z}=1$ であることを利用する問題。特に(2)については習熟度とひらめきが必要であったように思われる。(1)では角度から証明する解法もあるので、復習しておこう。(3)条件をうまく同値変形することができたかどうかポイントである。(4)これまでの誘導に乗りつつ、複素数をベクトルのように考えることができたかどうか問われた。図形的考察も必要となった一問である。

■文系数学 文責：角田

総評：標準

東大数学において典型的微分・積分、確率、図形と式がバランスよく配置されており、また、極端な難易度の問題が見られなかったのも、東大的な出題がなされていたといえるのではないのでしょうか。解答解説の「出題一覧表」を確認し、東大数学においてどの分野が頻出であるかを今一度認識し直し、今後の学習の上で参考にしたいです。一方で、頻出分野だけの「ヤマを張る」学習にならないようにも気をつけ、総合的な数学力を醸成することも意識しておく必要があります。

こうした学習の指針を立てる材料になることに加え、模試の意義は他にもあります。時間配分の練習です。正確な時間割のもとで完全に初見の問題を難易度判断しながら解くという機会から得られる経験値は、本番において難問に拘泥せず易問の完答と難問からの部分点の蓄積で確実に得点することを可能にする時間管理能力を磨く上で、大変重要になっていきます。単に問題を解く能力を磨くばかりではなく、そうした技術面を高めることによっても、数学の得点を向上、安定させたいです。

以下大問ごとに見ていきます。

第一問：やや易

東大の過去問においてほぼ確実に出題されるともいえる微分積分の分野からの出題です。加えて、出題される

際は第一問でかつ、計算主体で解きやすい問題となっていることが多いので、特にこの分野では苦手意識をなくしておきたいです。

本題は直線と絶対値を含む式で表される曲線についての問題ということで、最初に見た印象通りに解きやすかったのではないのでしょうか。絶対に落としたいくない一問です。

(1) $R=(a, k)$ などとおけば、 $PQ=QR=RS$ や $y=k$ が x 軸に平行という条件で P, Q, R, S の座標が求まり、そこから簡単に k の値が求まります。

(2)典型的な定積分の計算です。ですが、こうした計算問題でミスしてしまい手痛い失点を浴びる人もよく見かけます。普段から丁寧な作図や式整理を心がけ、ケアレスミスをなくすようにする努力は難問を解けるようにする努力と同じくらい重要なものです。また、この手の定積分の計算は対象性の利用や図の変形を用い計算量を減らすことでミスを防ぎやすいので、そうした手法の確認も行っておきましょう。

第二問：標準

立体ベクトルということで、受験生の皆さんは意識が及びにくい分野からの出題ではないのでしょうか。ですが、先述の通り、頻出分野に偏らず、こうした分野も出題された際には対応できるようにしておきたいです。特に本問は1次独立を繰り返し利用しベクトルを求めるという基礎的な問題であり、誘導も丁寧だったので、分野への熱心な対策が済んでいなくとも盤石な基礎力があれば太刀打ちできる問題です。

(1)解答解説の簡潔さからもわかるように絶対に落とせない問題です。

(2)今回はベクトル AK や AL をベクトル AI, AJ で置くことが問題文で誘導されているのでいいですが、(1)のような難易度の問題があえて設置されていることから、(1)で求めさせられるベクトルが本問で重要な役割を果たすことを、もしこのような誘導がない場合でも、感じ取りたいです。小問を設置することには必ず誘導の意図が背景にあります。

(3)五角形の周の長さと同様に臆してしまいがちですが、本問の舞台は立方体であるので、各線分の長さがわかれば三平方の定理を重ねることで回答できます。ときに厳つい見た目の問題文に出会うことがありますが、それらは自分の言葉で言い換えてみると単純なことだったりするケースがよくあるので、見かけのみで判断することは避けたいです。

第三問 標準

(1)は非常に解きやすい一方で(2)は $F(x,y)+kG(x,y)=0$ を用いて直線 PQ の方程式を求めるという解法を使いこなすのは少し難しかったのではないのでしょうか。(1)で確実に得点しつつも、完答が難しいと判断したのなら完答に拘泥せず、あっさり次の問題に取り掛かったり、易問を確実に取るために見直しをしたりするのも一つの手だと思います。

(1)解と係数の関係を用いることは容易に想像できるし計算も煩雑ではありません。ご多分に漏れず正解しておきたい(1)です。さらに a の範囲を求めさせたことに(2)の解法のヒントがあることを感じ取りたいです。

(2) y が x の一次式となるように $F(x,y)+kG(x,y)=0$ の k をうまく数値を決定することで、直線の方程式が求まるという話です。知らないときの問題です。さらにその方程式を a で整理し、 a の存在条件を求めることで PQ の通過領域を求めるというのは、(1)で a の範囲を求めさせられたことからわかるのではないのでしょうか。そのことに気づけば解の存在条件を求めること自体は典型問題で難しいというわけでもないと思います。

第四問 標準

(1)では図の対称性に注目することで色の塗り方パターンを簡潔に把握していて、これは確率漸化式でも用いたいテクニックだと思います。(2)でもパターン数こそ増えたものの同様に、対象性への着目で過不足なく簡潔に場合の数を把握しています。東大は典型問題を好むというよりは、完全初出に見えながらも、きちんと問題文を読

み解けば実は典型問題的な解法をするように至るといった風の問題を出すことを好む印象があります。先述のように、見た目のみで難易度判断せず、いわゆる「実験」を重ねるなどして問題の実態を把握することが正しい難易度判断と時間管理につながると思います。

■現代文 文責：安井

《第一問》

総評：やや易

文章全体にわたって臓器提供をメタファーとメトニミーの対比からとらえるとともに、後半部では「いのちの贈与」というメタファーを具体例も交えつつ説明していました。抽象と具体で段落の強弱がわかりやすく、設問自体も傍線部の前後の把握や指示語の処理などの基本的な手順が多かったため比較的解きやすいセットと言えるでしょう。

(一) 易

傍線部に関連する、第3~5段落にかけてのモトヤマさんの例は、第2段落で述べられていた「メトニミーの関係」の具体例となっていました。「臓器 a=レシピエントが受け取った臓器」、「Aの体=息子の体」という対応関係を代入すれば、あとは第2段落をまとめればよいでしょう。段落間の抽象と具体の関係性には常に注意を払って読むことが重要です。

(二) 易

理由説明の問題ですが、傍線部直前に「それゆえ」という因果を示す語句が入っていたので指示語「それ」の指す内容をまとめる、という指針は立てやすかったのではないのでしょうか。また第6段落全体にわたってメタファーの関係について説明しており、傍線部は段落のまとめの文であるという構造にもなっていたため、実質第6段落の内容をまとめる問題でした。傍線部の一文を把握する、指示語の内容をおさえるというのは現代文の基本的作業です。

(三) 標準

傍線部の逆接の理由を示す問題ですが、矛盾を説明するにはまず「臓器をメトニミーとして理解する」「根拠」の簡潔な言い換え、説明が必要であり、それが「禁欲すべき」すなわち否定する内容を述べるという流れで組み立てるとよいでしょう。傍線部の一文は第11段落全体の内容を総括する一文であり、(二)のように明確な因果関係や指示語はないものの、構造的には同じです。理由説明の問題ですが手順としてはやや内容説明寄りであると感じました。

(四) 標準

問題で問われている「いのちの贈与」のもつ意味とはすなわち、傍線部を含む一文末尾の「ドナー家族自身にとっても重要な意味をもつメタファー」の「重要な意味」と同内容であると見当がつくでしょう。傍線部直前に「こうして考えてみれば」とありますので指示語の指す内容を追っていきましょう。また「いのちの贈与」はそもそも7段落から登場していましたので7段落で述べられていたメタファーの意味についても言及しましょう。

(五) 標準

同音異義語に惑わされやすいですが、しっかり書けるようにしておきましょう。

《第四問》

総評：標準

詩人である筆者自身による、詩にまつわる言語論についての随想でした。本文独特の表記から少し古風な感じが漂ってきますが、そうした表面的なことに惑わされず落ち着いて読んでいけば傍線部前後に言いかえや因果関係の明示が見つかるため、それらを丁寧に処理していきましょう。着実に部分点を稼いでいけるところを落とさないことが重要です。

(一) 標準

内容説明問題ですが、擬人法的に用いられている傍線部の主語をかみ砕いたのちに「つれない態度」について説明してやる必要があります。第1段落の「日本語の五七や七五という音のつながり」や第3段落の「ニホンのむかしのコトバの意味や音」など、傍線部の「ニホン語のふるい韻律」の言いかえとなっている部分の前後から抽出しましょう。また第4段落は第3段落とほぼ同内容の具体的説明であるので第3段落の内容理解の参考にできるでしょう。

(二) 標準

傍線部の否定の理由説明ですが、その直後の文で「～だからである。」と説明されていることにはすぐ気づくでしょう。もしかするとそこで終わっている人も多いかもしれませんが、傍線部の「～ではない」という否定がでは本当はなんであるのかという指摘も否定の理由説明になりえます。傍線部を含む一文冒頭の指示語から、第7段落の内容をまとめましょう。

(三) やや易

傍線部直前に「この両方があるために」という明確な因果関係の記述があるので、「この両方」の指す二者を説明しましょう。

(四) 標準

まず、傍線部を含む文章の論理構造をおさえたいので、第12段落冒頭に「このことは」とありますので、第12段落は第11段落の言いかえであることを踏まえてまとめましょう。段落間の関係を常に把握しながら読むと内容理解もしやすくなります。

■古典 文責：平野

《第二問》標準

難しい単語や語句こそ多くはありませんでしたが、敬語の理解、和歌の解釈、男女関係や主従関係に関する古典常識といった古文の重要項目が多く盛り込まれた問題でした。これらに対する理解の多寡がストーリーの把握に大きく影響するため、この時期の古文の完成度を測るのにちょうどよい試験と言えるでしょう。特に物語の大筋を掴めなかった人は、これから古文の勉強にもう少し力を入れてもいいかもしれません。

設問一：標準

傍線部ア：「具足し」の訳し方に困った人が多いかもしれませんが、「具す」の意味が分かれば推測して答えられるでしょう。

傍線部イ：反語であることが見抜けたかどうかという問題です。反語であることを理解していることを答案で示しましょう。

傍線部オ(理科はエ)：「いかにもなりなば」の構造が「動詞連用形＋完了の助動詞『ぬ』未然形＋仮定条件の助詞『ば』」であることを理解したら、「いかにもなる」が「死ぬ」の意味であることもつかみやすいでしょう。

設問二(文科のみ)：標準

変化について問われているので、以前と現在の義経の態度の変化をまとめれば良いです。注釈の表現も適宜参照し、使える部分は遠慮なく使用しましょう。

設問三(理科は二)：標準

「憂き言の葉」とは武蔵坊弁慶から語られた義経の言葉であるため、その部分を要約すれば大丈夫です。各発言、およびその中で『』でくくられた部分がそれぞれ誰によって発されたものなのかを意識しながら読み進める癖をつけておくと、こういった問題に対処しやすいでしょう。

設問四(文科のみ)：やや難

傍線部直前の北白川の静について語られた部分を理解した上で、なぜ北の方は静に「似るべからず」、つまり「似るはずがない」のかを考えましょう。傍線部直後の「何と言ひても力なし」を参考に組み立てれば、解答の方向はずれないでしょう。

設問五(理科は三)：標準

和歌の逐語訳ではなく大意を取るだけで良いので、そこまで難しくはないでしょう。終助詞「かし」の直後で句が二つに切れ、「もし辛いのなら私も心変わりするはずなのに」→「それでも義経が恋しい」という流れをしっかりと押さえましょう。また、記述する際は「わかりやすく」という問題の指示に従い、適宜その前の内容も盛り込むようにしましょう。

《第三問》やや難

東大の二次試験では 2011 年以來出題されていない漢詩が出題されました。戦地での理不尽や苦悩を描いた内容自体は散文でもよく見られるものではありませんでしたが、漢詩特有の省略や韻を整えるための意味のつかみづらい表現も多く、苦勞した受験生も多かったのではないかと思います。漢文の第三問は例年国語の中で一番安定して得点が見込める大問であることが多いため、漢文の基礎が怪しい人はしっかりと復習しましょう。また、今回は出題されませんでした。漢詩の押韻のルールや技法などが今一つ頭に入っていない人はこの機会に復習しておきましょう。

設問一：やや易

傍線部 a：「少」を「若い」という意味でとれたかどうかポイントです。日本語の漢字と意味がずれる語は頻出なので、代表的なものはずひ覚えておきたいです。

傍線部 b：「故」を「古い、もとの」という意味で訳しましょう。また、「夫子」は「夫と子」ではなく「夫」のみを意味するのにも気を付けましょう。

傍線部 c：二行前の「作書与内舎」と対応しており、逆に「辺地」に行くものは何かと考えれば、「報書」の意味は返信であるというのは自然にわかるように思われます。

設問二：やや難

「何為(なんすれぞ)」から反語であることを理解し、「どうして他所の人の家(=妻から見た兵卒の家)にいつまでも引き留めていられようか」と訳したうえで、そのような考えに至る理由にも触れつつ一行でまとめる問題で

す。難しいですが、反語の理解と、直前の「報書」に対する返事であることを踏まえて答案を作りましょう

設問三(文科のみ)：やや難

まずは空欄eとfを含む二句が対句になっていることを踏まえ、空欄の二字が対になることに気づきましょう。そのうえで、兵卒が男性は労役・兵役に徴発され死屍累々となっている現状を目の当たりにしていることから男性よりも女性の方が厚く世話をする価値があると考えていることを捉え、eに「男」、fに「女」を充当しましょう。

設問四(文科のみ)：やや難

前問の空欄が埋まらなければ傍線部の内容すら分からず、非常に難しい問題です。一方で前問が解けた人にとっては、その根拠となった部分が本問ではそのまま答えとなるため割合容易に解答にたどり着けたでしょう。

設問五(理科は三)：やや難

問の「誰の」に関しては、前行の記述より「妻の」であることが容易に特定できる。また「どのような気持ち」に関しても、「何(なんぞ)」以下が反語になっていることを理解し、「自分だけが健全に(=兵卒から勧められたように他人に嫁いで)いきるようなことができようか」と解釈し、その背景として妻が「慊慊心意閑」であることを押さえれば過不足ない答案となるでしょう。とはいえ実際に試験本番でここまできっちり押さえるのはなかなか厳しいので、まずは反語の理解を中心とした字義の理解を心がけましょう。

■物理 文責：大橋

総評 やや易

第1問が力学、第2問が電磁気、第3問が波動というオーソドックスな構成でした。教科書では見かけないような内容を問われても、設問文での説明を正しく理解できれば、既習の基本原理を材料に考察が可能になるので、すぐに諦めるのではなくしっかり理解に取り組んでください。これから本格的に理科の演習を始める方も多いと思われませんが、模試も含め間違えた問題についてしっかり復習してこそ演習の意味があると考えます。この模試を実力向上のために存分に活かしてもらいたいです。

第1問 やや易

- I 基本的な力学の問題かと思います。等速円運動ではない円運動の扱いについて理解していればスムーズに解答できたでしょう。ここで誤答すると続くIIの解答に大きく響いてしまうので確実に正解したいところです。
- II 物体を置く常に水平を保つ板が円周上を動くという見慣れない状況ではありますが、設定を読み込み、慣性力など基本に立ち返って一步步着実に思考していけば正しい議論を展開できるはずですが、力の符号や三角比などについてのケアレスミスは引き続き避けたいですね。

第2問 やや易～標準

- I 自己エネルギーという言葉は初めて見た方も多いことでしょう。とはいえ導入として本文が用意されており、読解できればそこまで複雑で難解な概念ではないと判断できるに違いありません。そこさえクリアしたらこの第2問Iはすぐに答えを導けます。
- II 導線を通した電荷の移動により物体が上昇するという現象自体はよく見るものではないかもしれませんが、これも誘導説明を読めば、力がつりあっている状態を保ちながら運動しているという力学的にはシンプ

ルな現象だと把握でき、解き進めることができます。(5)の記述問題では、計算結果の考察ではなく系全体の現象を俯瞰的に考えることが必要で、大変だったかもしれません。

第3問 易～やや易

- I スネルの法則の導出であり、これは落とせません。物理の公式について、丸暗記ではなく理解による導出ができるように日頃の学習から心がけてもらいたいです。この問題に関しては導出したことがなくても誘導にしたがってその場で導き出せるようになっていました。
- II 屈折を何回も繰り返すという操作自体は経験が薄いかもしれませんが、特に難しいこともなく角度の計算を行うだけです。見かけない題材というだけで敬遠するのはもったいなさすぎます。
- III IIの延長とも言える問題です。(3)で具体的な数値計算がありますが、数値を代入してみれば全く煩雑ではなく、これを飛ばすのは結果的に得策とは言えません。当然本番の問題で煩雑な計算をさせることも十分に考えられますが、今回のように簡単な計算になるように値が設定されている可能性があることを踏まえると、とりあえず式を立てて代入してみるというトライに価値があると言えると思います。また、(4)で発想が必要な記述問題がありますが、屈折というトピックのなかで“色づく”といえれば分散と気づきたいものですね。

■化学 文責：谷田部

総評：標準

どれも典型的な問題で、知識問題が少ないのでこれが試験本番だったら化学の得意な人、苦手な人で点数差が露骨に出ていると思います。他の教科との兼ね合いもありますが、化学はしっかりと問題演習を積んでおきたいです。試験では時間に追われる緊張から、ミスが多発します。問題文の長い問題ではついつい飛ばし読みをしてしまい大事な一文を読み飛ばしてしまうなんてこともあると思います。本番で落ち着いて解けるように自分なりの理科の作戦（有機が簡単だったら有機から解く、煩雑な計算問題は捨てる等）を今のうちから立てておきましょう。

第1問：標準

実験データから有機化合物の部分構造を推定し、知識に基づいて組み立てた後、その化合物に関連する内容を問う、定番の問題です。情報3からEが即座に決まり、情報4を元にC、Fを決定すると、EとFが組み合わせあったBが求まり、Aの分子式からDが求まります。ウ、ク、ケはどれも基本的な問題ですが前の問題ができていないと回答できないので差がつきやすい大問だったかなと思います。また、天然高分子化合物、合成高分子化合物は学校で習うのが遅い範囲で差がつきやすいので、よく勉強（復習 or 予習）をしておきましょう。

第2問 I：標準 II：やや易

I：ヨウ素滴定に関する典型的な問題です。前半は簡単な計算から硫化鉄の組成を求め、後半では実験に関連して思考力を問う問題が出題されています。アは、二酸化硫黄が還元剤、ヨウ素が酸化剤として使われていることを思い出して反応式を完成させたいです。イ、ウでは文章中に書かれている反応を丁寧に反応式に表わせれば問題なく得点できるはずです。エ、オはそれぞれの器具の用途を正しく理解していれば得点できます。カは他の問題ができていなくても答えが何となく分かるので時間がなくてもここだけは書いておきたいです（ただしひっかけの場合もあるかもしれないので時間があるときはしっかり解きましょう）。

II：ニッケルカドミウム電池に関する問題です。キクは文章に反応物と生成物が書いてあるので得点したいです（クができていないのにキができなかった人は要復習）。ケもよくある問題で、クで反応式が書ければ簡単に解けたかと思います。コに関しては、水酸化ニッケル（II）が無くなった場合に反応する物質を考えましょう。この

問題は正解したいところです。

第3問 I：標準 II：標準

I：典型的な気体の溶解と平衡に関する問題です。どれも見慣れた問題ばかりですが、実験内容が目で見えて分かりそうなこと、数値が多く設定されていること、ヘンリーの法則が曖昧な人が多いことで高得点を取れる人はなかなかいないのではないのでしょうか。無機や有機の実験に関しても言えることですが、実験の行程を丁寧に追っていくことが必要です。

II：一見すると見たことない問題の様に見えますが結局は典型的な蒸気圧の問題で、市販の問題集でもよく見るような問題です。クの記述問題に関しても、蒸気圧の基本的な知識を踏まえれば何を書けばいいのか簡単に分かるでしょう。蒸気圧は苦手とする人が多い分野です、分からなかった人は基礎に立ち返って復習しましょう。

■生物 文責：平井

総評：やや易～標準

全体を通して、難問と思われるような問題はなく、実験も比較的整理しやすいかと思われますので、時間を大幅に使わず、落ち着いて回答していきたい問題セットでした。

第1問：やや易～標準

Iでは、考察問題がなく、IIの、実験を基に考察する問題においても、一つ一つの実験から得られたことをつなげて考えれば解答にたどり着くことができる問題なので、ここである程度、点数を取っておきたいです。

I.A~C A,Cは特に、実際の入試で問われることが非常に多いですので、ここで落としてしまった人は、入念に復習しましょう。

II.D この知識問題も、取っておきたいです。

E IL-6が、ノックされたものとされていないものでの、結果を比較して考える問題です。ここも本番では落とせない問題でしょう。

F Eと同じようにして考える問題ですが、それぞれの物質が何を意味するものかを押さえたうえで、考察しましょう。

G 実験の中で、フィードバックを起こすような仕組みは多々見られるので、そのような考え方があることを押さえておきましょう。

H ここまでの問題に答えられた方には、是非とも正解してほしい問題ですが、たどり着けなかった人は、時間をかけてでも、自力でたどり着けるようになるまで復習してください。

第2問：やや易～標準

I、IIともに実験があり、情報処理を求められますが、その分、一つ一つの難易度は、抑えめですので、ここも大幅な減点は控えたいです。

I.A,B よく問われる知識です。押さえておきましょう。

C チャネル、担体、ポンプの違いは、正誤問題や空所補充問題で、聞かれることがありますので、整理しておきましょう。

D 取っておきたい問題です。

E 特に、このような正しいものをすべて選ぶ問題では、部分的な判定ではなく、要素同士の因果関係にも注意して判断しましょう。

F 本番では、取っておきたい問題です。

II.G 丁寧にグラフの情報を整理すれば取れますので、焦らず取っておきたいです。

H Gとともに正解しておきたい問題です。

第3問：標準～やや難

IIの問題が、慣れていない内容だと思うので、その分、Iの知識問題で落とすことなくいきたいです。

I.A~C 本番では、落とさずに行きたい問題ですので、できなかった人は、現象の例まで押さえておきましょう。

II.D ブリッキングについては、聞きなれない単語ですが、リード文で解説されているので、正解しておきたいです。

E 分離比の問題は、染色体が絡むとよく出題されるので、慣れておく必要があります。

F,G この問題セットでは、一番取りづらかった2問だと思います。ですが、進化は入試のテーマとしてよく出されるので、できなかった人は、復習に努めてください。

■世界史 文責：佐々木

総評：標準

東大の世界史と同じく、ほとんどの問題が教科書に載っている内容からの出題でした。しかし、解説を見れば分かっていても実際には解けなかった問題もあると思います。今回思うように得点できなかった人は、教科書レベルの事項を自分で一から説明できるくらい正確に理解、暗記していきましょう。また、今回は東大の世界史で頻繁に問われているテーマについて多く出題されています。この機会に知識を確実なものにしましょう。

第一問：標準

東大の世界史では共通点、相違点に注目させる問題が多く、今回もその類題と言えます。このような問題では、比較する対象に関して比較事項を対応させて述べるとより良い解答になると思います。今後過去問などで同じような問題に取り組む際はこの点を意識して解答を作ることができると良いでしょう。

また第一問ではリード文から書くべき内容を読み取ることが重要です。今回もリード文に注目すると、ムガル帝国と清の支配体制や土地制度、懐柔策、宗教政策について言及し、さらにそれらの両帝国の盛衰への影響まで述べる必要があることが分かります。20行も解答を書くことができるからといって、思いついたことを闇雲に記述しても得点には結びつきません。書くべき内容を見極めて高得点を目指しましょう。

今までの模試では、第一問で習っていない範囲を問われて解答用紙を埋めるだけで辛かったかもしれませんが、今回はしっかり書き切れた人も多かったのではないのでしょうか。この問題をしっかりと見直して今後の過去問演習などに生かしてください。

第二問：標準

「異文化との出会い」をテーマとした論述問題でした。もちろんどの問題も教科書にない内容ではありませんでしたが、いざ記述するとなるとなかなか書けないものもあったかもしれません。東大の世界史では第一問を重視してしまいがちですが、第二問でできるだけ失点しないことも重要です。教科書レベルの事項はどの年代、どの地域を問われても説明できるようにしておきましょう。また今回のテーマ、文化交流は東大の第一問でも頻繁に問われています。今回は問われませんでしたが12世紀ルネサンスなどの文化の接触・融合にまつわる事象は今後の学習でも意識できると良いでしょう。

問(1)(a)やや易(b)標準

(a)国土回復運動(レコンキスタ)の経過は頻出事項です。スペイン王国の成立の部分を見落としがちですが、文字数を考えれば入れておくのが良いと思います。ついでにイベリア半島の歴史を頭の中で一気に繋げておくと、こ

の地域に関する問題には大体対応できると思います。

(b)思想の内容を問う問題を苦手とする人は多いと思いますが、まずはポイントとなる事項を確実に押さえましょう。今回のように思想が与えた影響まで答えさせる問題も多く見られるので、答えられなかった人は教科書で確認するとともに今後の学習においても意識できると良いでしょう。

問(2)(a)標準(b)やや難

(a)図版だけでボロボドゥールと判断するのは難しいため問題文の手がかりから読み取ります。「大乘仏教寺院」などがヒントになるはずですが、ボロボドゥールを含め東南アジアの王朝や寺院の宗教(宗派)は複雑なので一度整理し直すことをおすすめします。インドネシアの植民地化までの過程、民族運動も頻出事項なので要確認。

(b)現代史まで手が回っていなかった人も多いと思います。すべて覚えようとする膨大な量になる現代史は、まずは基本レベルの事項の知識から優先して確実に覚えていきましょう。

問(3)(a)標準(b)標準

(a)「南フランス」の部分でアルビジョワ派を思い出せると高得点に近づけたかと思います。ただ、アルビジョワ派がマニ教の影響を受けていたことは知らない人も多かったかもしれません。

(b)二つの事項について記述しなければならないことに注意してください。宗教改革以降のイギリスの宗教に関する問題は頻出であり、また革命にも関連してきて重要なので、どの部分を聞かれても確実に答えられるように正確に覚えておきましょう。

第三問：やや易

「道具の歴史」をテーマに幅広い地域、年代から出題されました。標準レベルの問題が多かったものの知識の穴が見つかった人も多いのではないのでしょうか。また、問われていることを勘違いしていた人もいるかもしれません。第三問は本番ではできるだけ落とさず問題なのでしっかりと見直しをしておきましょう。加えて、第三問は問題文も読み直すことをおすすめします。教科書などとは異なる視点、文脈で述べられていることも多く、第二問対策として有効だと思います。

問(1)(2)：易、問(3)-(5)：やや易、問(6)-(10)：標準

問(3)ジャンク船と誤答した人は、ダウ船とジャンク船のそれぞれの特徴、使用した商人やその時期を整理し直しておきましょう。各事項をつなげて頭に入れておくと忘れにくくなると思います。

問(5)アカプルコ貿易については第二問で問われても確実に説明できるようにしましょう。背景、貿易に関わった商人や国々、貿易品目、影響まで理解、暗記できると理想的です。忘れてしまった人は教科書の該当部分を確認するといいたと思います。

問(6)今回問われた問屋制家内工業、あるいは工場制手工業などは、単語だけでなくそれらの内容まで理解しておくのが望ましいです。

問(7)中国史、特に明清代の文化史はややこしいです。この機会に頭に入れてしまいましょう。時間が経って忘れてしまうかもしれませんが一度真剣に覚えた事項は案外思い出しやすいと思います。

問(9) 絵画や建築などの文化史は、資料集などを眺めながら覚えた方が頭に入るように思います。

問(10)イランは世界史のところどころに登場しますが頭の中で流れが繋がりにくいと思います。第二問で問われても説明できるように、解説や教科書を読んで整理しておきましょう。

■地理 文責：大岡

総評：標準

受験地理に必要な基本的知識を問う問題が多かったが、教科書的な知識を越えながらもそれに基づいて思考力を

働かせることで解答できるような問題も散見された。今回記述がうまく書けなかった受験生も、これからこうした問題演習を重ね、地理的な思考力を焦らずに磨いてほしい。

〈第1問〉：標準

第1問総評

中国の水資源や PM2.5 の問題を題材として、自然環境に関わる基礎的な内容を問う大問である。難解な考察を要する問題はほとんどなく、本番相当の頭の使い方や知識が身につけているかを確認できる問題だった。

設問 A：標準

- (1) 降水量のグラフと都市の位置を結びつける問題。内陸部と海岸部の気候の特徴、及び華中・華南の気候を大まかに把握できていれば易しかっただろう。
- (2) シンチャンウイグル自治区における特徴的な水資源の利用を問う問題。同自治区が山岳に囲まれ、且つオアシス農業を営んでいることを想起すれば、特別な知識がなくとも解答にたどり着けるだろう。
- (3) 知らなければ解けない。こうした問題で得点するためには、普段から資料集をながめ、細かい知識を少しずつ頭に入れていく地道な努力が必要である。
- (4) 中国の具体的な動向を説明させることによってヴァーチャルウォーターの概念の理解を問う問題。中国がどの地域にいかなるアプローチをとっているかを知らなくとも、指定語句を見ることで想像することができるだろう。

設問 B：やや易

- (1) グラフから PM2.5 がどのように季節変動しているか読み取れば、冬の増加から人為的原因が、地域ごとの変動から自然的原因が容易に推測できる、易しい問題である。
- (2) 中国におけるモータリゼーションの急速な進展に基づいて解答する問題であり、大変易しい。
- (3) 指定語句が記述すべき内容を適度に示唆しているので、これをヒントにすれば書きやすかっただろう。ただ、「送電網」は慣れない用語であり使い方に迷ったかもしれない。そのような場合でも焦らず、与えられた問題の中で送電網に関わる内容が書けないか、想像力を働かせることが重要である。

〈第2問〉：標準

第2問総評

グラフや表を読み取り、その内容をもとに設問に答えていく東大の典型的な問題である。(1)で誤答すると以後の設問に深刻な影響を与えるため、最初の読み取りを慎重に行うことが何よりも重要である。

設問 A：標準

- (1) 地域ごとに特徴のある統計項目があり、それをヒントに地域を絞っていく、表の読み取りの基本問題である。以後の設問に大きく影響する問であるため、必ず正答を得たい。
- (2) とうもろこしの食用以外の2つの用途、及びその需要拡大の背景もすぐに思いつくだろう。容易な問題である。
- (3) 地域別農業の基本問題であるが、指定語句が、それをもとに対比構造を作って解答することを暗示している。こういった皆がとれる基本問題で失点しないようにしたい。
- (4) アジアにおいて緑の革命が果たした役割は、地理で頻繁に問われるため、必ず想起できるようにしたい。アフリカの米の自給率が極めて低い理由を、どれだけ上手く説明できたかがこの設問の得点を左右しただろう。
- (5) 各地域の気候や土壌の特色を簡潔に述べる問題。普段から、各地域の細かい知識を頭に入れるだけでなく、

地域ごとの大まかな特色を巨視的に把握する学習を行っていることが必要である。

設問 B：やや難

- (1) 各地域の水産業の特色を、その地形・気候の特色と絡めて把握しているかが問われた問題。以後の設問に影響する間であるから、慎重に解いて必ず正答を得たい。
- (2) 水産業の生産量の安定と不安定の対比を答えさせ、その理由を簡潔にまとめる問題。「資源管理」を用いることが分からなかった受験生は、地理で頻繁に問われるノルウェーの水産業のあり方について、資料集を読むなどして復習しておこう。
- (3) インドネシアの海面養殖業については書きやすかったと思われるが、中国の内水面養殖業はあまりなじみのない内容であり、書きづらかっただろう。語群の「栄養」から、富栄養化や汚染などの環境問題を想起できれば十分である。

〈第3問〉：やや易

第3問総評

設問 B は、なじみのない統計を用いて地理的思考力を図る東大地理の対策の第一歩に適した問題であった。一方で設問 A・C は、教科書的知識によって正答できるような易しい問題が多かった。

設問 A：標準

- (1) 常識的問題。ただ、戦後史に関わる問題は地理で多く出題されるため、これを機に、特に冷戦が世界に与えた地理的影響についても確認しておきたい。
- (2) 石油危機後の工業の流れに関する基本問題。ただ、工場立地が変化した理由について答えるのが容易でも、解答例のように各地域で盛んな業種に言及するのは難しいだろう。
- (3) 戦後経済で重要な意味をもったプラザ合意を思い出せば、円高を背景に現地生産や海外への工場移転が行われたことを書くのはたやすいだろう。しかしそれにとらわれ、長々と書きすぎて、産業構造そのものが変化したことも要因の一つであることを見落とさないようにしたい。常に多角的な視点で地理的考察を行えるよう訓練することが重要である。

設問 B：やや易

- (1) あまりなじみのない品目であるとはいえ、図 3-2 において減少傾向にあるアとイ、増加傾向にあるウで分けて考えることができれば、容易に解答が導けるだろう。
- (2) テレビでよくとりあげられるシャッター街の光景を思い浮かべれば、指定語句から地方で起こった変化について想像して書くことは難しくない。

設問 C：易

- (1) 東京都と埼玉県の昼夜間人口比率についてある程度イメージをもっていれば容易に判定できる問題。ここは必ず正答を得たい。
- (2) 人口移動の歴史に関する基本問題。1900 年代後半の人口移動の歴史の問題は地理で頻出なので、必ず押さえておきたい。
- (3) 年月が経つことによって若者が定年退職の時期を迎えるという常識的事実を、地理の統計に適用する問題。本番の試験で柔軟に頭を働かせることも重要だが、普段からこうした「視点」を一つ一つ取り入れていく学習を心がけたい。

■日本史 文責：石原

総評：標準～やや難

特に前半戦がなかなか解きにくいセットになっているなという印象です。間接的な記述から解答の核を導き出したり、細部にも着目しながら解答の方向性を決めて行ったりと、東大日本史において持っていれば強い武器になるスキルが問われたのではないのでしょうか。拾わなければいけない部分と、取れなくても気落ちせず切り替えていくべき部分の濃淡をしっかりと見極めていくことができたかどうかを最も重要です。できなかったなら、この所感や解答解説を読み込んで、その見極めの感覚を少しずつでも鍛えていってください。

第一問

A: 標準～やや難

まず、解答の形式が正しいものだったかを確認しましょう。変化を問う問題で変化前・変化後の両方が構成要素になっていない解答は、原則論外です。まず変化を明示してください。

変化前について、それほど読み取りで難しいことはありませんが、「国家としての通交“は”」とか、「太宰府に無断で」など、ちょっと間接的な書かれ方をしても、正しく問題文を読み解くスキルは必須です。できなかった人は、さらっと読み流すのではなく、一言一句読み漏らさないように注意して問題に取り組む癖をつけましょう。日本版華夷思想についても理解は必須です。一方で、変化後および変化の理由は少し難しかったかもしれません。新羅との私貿易を行っていた者が国内の反乱分子と血縁的に近かったこと、新羅の内状が不安定だったことなどを総合して、それらが結びつくことを懸念して制限をかけた、という結論を導くのはなかなかの思考力を要します。ですが、問題自体の問かけ方が曖昧なものでも、答えは曖昧ではいけません。類推も駆使して方向性の定まった解答作成を心がけましょう。

B: やや難

日本と高麗の相互意識はほとんど難しくありませんが、高麗→日本の関係を朝貢関係とまでかない方が良く、というのは引っかけやすいですね。日本が敵対視していたことは割とはっきり読み取れるので、それと対立させる形で「友好的」くらいの言葉が使えれば良いですが、あまり気にする必要はありません。一方で、背景については中々に難しかったのではないかと思います。事件への対応審議を中央で行なったことまではとどり着いても、正史編纂が途絶えていたことにまで言及して貴族の日記がメインの史料になっていることを明示するのは容易ではなかったでしょう。小右記が基本史料と認められる背景という要求に、要素の異同はあれ自分が直球で答えられていたかどうかは確認しておいて欲しいところです。

できなくても気落ちするほどのところではないので、本番中気持ちを切り替えて行けたかどうかの方が大切です。

第二問

A: 標準

鎌倉幕府との比較を「踏まえ」なので、鎌倉幕府の政権としての内実についてまで明示する必要はありません。あくまで比較事項の絞り込みに使えば良いだけです。さて、平氏政権が貴族的な性格をまだ色濃く残していたことは、東大受験生ならば必ずおさえておかなければならないポイントです。また、鎌倉幕府の支配を特徴づける地頭は、平氏政権下では公的な主従関係の構成要素という性格をあまり持ち合わせていなかったこともこの機会に把握しておきましょう。政権としての期間については、読み取れたら本番でも十分戦っていける力があることの証左にはなるでしょうが、できなくてもそこまで気落ちする必要もないです。

B: やや易

これは取りたい問題ですね。読み解きにそれほど不自由しなかったはずですが、問題自体は難しくありませんが、トピックとしてはかなり重要なものになってくるので、解答解説をしっかりと読んでおいてください。

第三問

A: 標準～やや難

衣料革命については多くを語る必要はないでしょう。この機に、綿と生糸について中世から近代までの歴史を整理してインプットしておいてください。現時点で、両者を混同することなく理解できているでしょうか。さて、本問の肝はそこに絡めた上方漁民と物流の動向です。

綿花栽培、房総というキーワードから干鰯を連想するのはちょっと難しいですね。ここさえ掴めば(3)の意味も分かってくるのですが、逆に掴めないと解答をまとめるのにだいぶ苦労したかもしれません。定期船と抽象的に書いてある部分の具体化ができたかどうかは、本番で大きくは響かないですが、洗練された解答だなという印象を採点官に与えるか否かの分水嶺になったでしょう。第一問でも述べたことですが、細部にまでしっかり注意を配りましょう。

B: 標準

(4)、(5)を総合すれば良いただけなのですが、2行でしっかり伝えたいことを伝えきるには、それなりに凝縮された表現を用いる必要があるでしょう。江戸時代の商品流通の構造については、近世初期から近代初期に至るまでの大まかな流れをしっかりと把握しておきましょう。近世の最重要課題です。また、銚子が醤油の製造で有名なことも、醸造業というワードから想起するのは難しくなかったはずですが。

第四問

A: 標準

増加要因については割と容易に想像がついたでしょう。1870年代後半から1880年代前半については、何らかの事象をインフレ・デフレ的側面に繋げられることが多いと思います。

文化面については、二段落目のところで割とわかりやすく書いてありますね。これを文明開化の地方伝播という表現に落とし込むのは難しかったかもしれませんが、似たようなニュアンスのことは書けたはずですが。交通面についても、三段落目後半の内容から鉄道などを補う交通手段として用いられたことを想起するのは難しくはなかったでしょう。

B: 標準

1870年台前半に取った政策は地租改正だとすぐわかるはずですが。繊維産業(紡績・製糸)の発展と絡めて、これらの現物を地方市場などで換金していたのだろうな、そしてそれが荷車などの利用を増大させたんだろうなという推測をするのはさほど難しくはないはずですが。農業生産と関連づけながら、というのも分かれると他の受験生に差をつけられたかもしれませんが、まあ分からなくても大きな問題ではないでしょう。肥料として人間や動物の排泄物が用いられていたというのは、近世でも厩肥として学習した人もいるでしょうし、そうでなくても半ば一般常識的なところもあると思いますけどね。ともかく、本問を機に近代の繊維産業の発展について復習しておくことをお勧めします。